

# Hospital Play Specialist 養成カリキュラム

The Curriculum of the Education of the Hospital Play Specialist

松平 千佳

MATSUDAIRA Chika

## I. 本学における HPS 養成事業について

平成 19 年 8 月 1 日付で文部科学省から採択され、静岡県立大学短期大学部では「離退職保育・看護資格保有者のキャリアアップのための HPS 養成教育事業」を開始した。

Hospital Play Specialist(以下 HPS)は、医療機関や医療行為が伴う施設に入院・入所あるいは通院する子どもとその家族の、苦痛、ストレス、不安、寂しさなどに対し、遊びプログラムを提供し支援する専門職である。現在 HPS は英国とニュージーランド、オーストラリアで養成されており、日本においては初めての養成プログラムとなる。本学の養成プログラムの特徴は、英国の HPS 関連団体、National Association of Hospital Play Staff (HPS や CLS など遊びをつかって病児を支援する者、またこの領域に関心のある者が参加できる職能団体) および、Hospital Play Specialist Education Trust (HPS の教育の水準を維持し、HPS としての最終認定を行う英国教育省に認められた団体) と連携を結び、日本でおこなう教育内容に対し助言だけでなく具体的な支援を受けている点にある。4 週間以上になる講座を約 3 年間で計 5 回開講し、それぞれの講座に 10 名程度の講習生を受け入れていく計画である。また講座修了者には、学校教育法に基づく履修証明書および資格認定書を与えることができる。

本論文は、HPS 養成事業のカリキュラムについてまとめ、今後発展していく事業の基礎資料にすることを目的にしている。

## II. 本学における HPS 養成講座の特徴とカリキュラム

### 1. HPS 養成講座の特徴

本校で計画された講座は、英国で活躍する 2 名の HPS が来日してコアカリキュラムを教授するとともに、日本人講師で病児や障害児に対する理解を深めるための講義を配し実施される。これは先に紹介した英国の 2 団体より、「英国の養成のあり方をそのまま導入してもまったく根付かないだろう。日本の HPS 養成は、日本の文化に根付いて新しく模索されるべきである」(HPSET 会長発言) という助言に基づいたものである。また、HPS は、小児医療の専門多職種チームの一員として、PLAY を用いて病児を支援する専門職であり、大事なことは、小児医療チームの一員として働けるかどうか、また HPS として病児にかかわった結果を他の専門職と共有できるかどうかであり、そのためには、小児医療にたずさわる看護師や医師や当事者の家族など、さまざまな視点における学びが必要不可欠であると考え、各方面の日本人講師陣を配している。

## 2. HPS 養成講座のカリキュラム

HPS 養成講座のカリキュラムは、大きく分類して2つ、講義と実習に分けられる。また講義は、英国人 HPS による講義と演習、また日本人講師による講義と演習に分けられる。英国から招聘している HPS の一人は、ノーマ・ジュンタイ氏である。ジュンタイ氏は、現在 National Association of Hospital Play Staff の会長であり、ロンドンにあるキングストン病院にて長年 HPS として活躍されてきた人物である。もう一人はフランシス・パーバラ氏である。彼女はスコットランドにある HPS 養成カレッジであるステーブソンカレッジコースの責任講師であり、またエジンバラこども病院にて HPS として活躍している人物である。2名とも、4階級に分かれている英国 HPS の最高位である HPS マネージャーである。

まずは、英国人 HPS の講義・演習内容について以下紹介する。

### (1) 英国人 HPS 講義・演習編

講師名 ノーマ・ジュン・タイ (NAHPS 会長、キングストン病院プレイコーディネーター)

#### (教育の目標)

1. 病院における遊びを用いた支援の歴史的概念を理解し、現在の小児医療のモデルへ及ぼしたその重要性を検討します。
2. 病気や入院がもたらす、全年齢層のこども、きょうだい、親への発達及び心理的影響の理解を深めます。
3. 病院での遊びを用いた支援において、大人の介入による影響を把握します。

#### (受講生への教育成果)

1. 病院での遊びを用いた支援を成功に導かせる要因を特定できます。
2. ホスピタル・プレイ・スペシャリストが促進する病院における遊びの効用・目的を分析できます。
3. 慢性疾患、長期入院、特別支援、隔離病棟にいるこどものニーズを観察し、判断できます。
4. 専門多職種チームとの協力による影響を分析できます。
5. 医療現場において、自身の職務を判断できます。
6. さまざまな医療現場において、幼児や青年期のこどもにとっての安全である遊び環境の重要性を検討できます。

#### (カリキュラム)

- 第1講 病院における遊びを用いた支援の歴史
- 第2講 HPS の役割：日常のあそび、気を紛らわす遊び（ディストラクション）
- 第3講 HPS の役割：準備（プレパレーション）、個別支援及び家庭訪問
- 第4講 乳児と幼児に対する HPS のかかわり
- 第5講 思春期の子どもたちに対する HPS のかかわり
- 第6講 きょうだいに対する HPS のかかわり
- 第7講 慢性疾患に対する HPS のかかわり
- 第8講 隔離病棟にいる子どもに対する HPS のかかわり
- 第9講 特別支援が必要な子どもに対する HPS のかかわり
- 第10講 病気がもたらす家族への影響
- 第11講 病院における遊びの支援とボランティアの活用法
- 第12講 子どもの遊びにおける大人の役割

## 第13講 授業のまとめ及び質問

講師名 フランシス・バーバラ氏（スティーブソンカレッジ、HPS 養成コース責任講師）

（教育の目標）

1. 受講者の専門的職務への内省の理解を深めます。
2. 病気や入院がもたらす、全年齢層のこども、きょうだい、親への影響を観察し、理解し、判断します。
3. さまざまな場面において、専門化された遊び（プレパレーション、ディストラクション、ディバージョン（気分転換）を含む）を適用します。
4. 痛みを我慢している幼児や青年期の子どもとその家族が必要としている支援の理解を深めます。
5. 保健教育におけるホスピタル・プレイ・スペシャリストの役割を考慮します。

（受講生にもたらす教育成果）

1. プレパレーション、ディストラクション、および治療をビジュアル化できるさまざまな遊びの技術を検討できます。
2. 医療現場において、遊びによる個人およびグループ支援方法を特定し、計画し、評価できます。
3. 発達段階によって異なる、幼児や青年期の子どもの遊びに対する関わり方を分析できます。
4. 健康を促す遊びに関係付けて、専門的職務への内省ができます。

（カリキュラム）

第1講 痛みのコントロールとアセスメント

第2講 痛みのコントロールとアセスメント

第3講 専門多職種チームの一員としてのHPSが家族を支援したり、幼児や青年期の痛みを軽減する方法

第4講 入院前に実施するプログラム

第5講 遊びを使ったプレパレーション入門

第6講 ディストラクション技術

第7講 採血。痛みを伴う処置を受けている子どもに対するディストラクションの効果

第8講 ディストラクションのための道具を使ったワークショップ

第9講 ガイドイメージ法入門

第10講 ガイドイメージ法実践

第11講 リラクゼーション技術、幼児や青年期の子どもが感じる痛みに対応するためのリラクゼーション技法

第12講 リラクゼーション技術の学習、ハンドマッサージの実践

第13講 授業のまとめ及び質問

（2）国内講師、講義・演習

講師： 松平 千佳（静岡県立大学短期大学部）

（講義テーマ） HPS として必要な遊び理解

（教育の目標）

ホスピタル・プレイ・スペシャリストは、遊びの専門家である。遊びを用いて病児を支援する専門

職である。ホスピタル・プレイ・スペシャリストになるためには、何よりも遊びの力を理解し、それを使う能力が求められるのである。残念なことに、現在の日本の小児医療の中で「遊び」の重要性について認知しているものは小数であり、むしろ治療と遊びを対立した形でとらえる医療従者が多いように感じる。これでは、HPSを普及させる以前に、専門職として育つ土壌が整っていないことになる。受講生は、遊びの重要性を認識し、遊びを病院に位置づけることはきわめて社会的・文化的な課題であることを理解しなければならない。この講義では、HPSの基幹となる「遊び」そのものについて学ぶ。

(受講生への教育成果)

1. 本講義を通して遊びとは何かが理解できます。
2. 本講義を通して、遊びの歴史が理解できます。
3. 本講義を通して、子どもの福祉の理念が理解できます。
4. 本講義を通して、HPSとして必要な職業理念が理解できます。

講師名 藤中 隆久 (熊本大学教育学部 臨床心理学)

(講義テーマ)

子どもの発達とそれに関連した遊びについて多様な知識を得る

(教育の目標)

対人援助者に必要な知識は、①対象理解と②援助のための方法技術です。この二つに関して、「発達」と「遊び」という視点からの知識を得て、その知識を自己に根ざしたものにしておくことを目指します。

(受講生への教育成果)

1. 子どもの発達についての一般的な知識を得ることが出来ます。
2. 遊びの発達と遊びの意義に関する一般的な知識を得ることが出来ます。
3. 援助技術としての遊びに関して、見解が深まり、一般的知識を活用する力が身に付きます。

講師名 岡田 節子 (ウソン大学 障害児保育・発達)

(講義テーマ)

特別なニーズをもった子どもたちへのかかわりを学ぶ

(教育の目標)

1. 一般に幼児期の子どもの生活は、睡眠や食事といった基本的身近処理を除くと、遊びが生活の中心であり、それは成長・発達と共に時間的にも空間的にも拡大されていきます。子どもが日々嬉しそうに遊んでいる、或いは親と子の楽しい相互交渉が成立する時、親は子どもの成長・発達過程を確認することができ、また育児することの自信や喜び・充実感を味わうことができます。こうした遊びの意義は、障がいや慢性疾患等により特別なニーズをもった子どもにとっても何ら変わることはありません。そこで、先ず子どもの遊び一般の意義、遊びの内容や種類を学びます。
2. 「遊び」とは自由で自発的なそれ自体が目的となった活動であり、楽しさや満足感をもたらすものです。特別なニーズをもった子どもたちがこうした遊びを自発的に展開するためには、その子どもの疾患や障がいの種類、内容や程度によってどのような環境を整えたらよいのか異なってきます。したがって、各々の子どもの疾患、障がいの状態を正しく理解し、その

上で、各々どのような遊びが成立するのか、どんな玩具、空間、遊具、人的・物的環境が適しているかを学びます。

3. 特別なニーズをもった子どもとその家庭のニーズは、「よりよい医療と療育」、「不安や孤立のない安定した家庭」、「積極的な社会参加」に集約されます。こうしたニーズを解決し、親と子どものQOLを向上をさせるためには、子どもや家族自身が主体的に日常生活にとりくむことができるような支援や情報提供が不可欠です。そのためには、関係職種の協働によるサポートシステムの構築が必要であり、HPSがその一員としてどのような取り組みをしたらよいかを学びます。

(受講生にもたらす教育成果)

1. 子どもにとって「遊び」とは何か、その内容や種類にはどんなものがあるか等について、子どもの成長・発達をふまえて理解します。
2. 子どもの疾患や障がいの状態別にどんな遊びが喜ばれるのか、留意すべき点は何かについて学びます。障がいや発達別の「遊びモデル」について学びます。
3. 病院や療育機関退院後の在宅や保育・教育の場でのサポートシステムの構築方法について学びます。

講師名 後藤 真千子 (大阪府立母子保健総合医療センター HPS)

(講義テーマ) 日本における HPS の役割と実践

(教育の目標)

1. イギリスと日本の病院内外環境の違いを知る
2. HPS の理念と視点を理解する
3. 日本の病院における HPS 業務の実践を考える
4. 日本の病院での HPS と多職種との連携を考える
5. 日本の医療システムの中での HPS の役割を理解する

(受講生にもたらす教育成果)

1. イギリスの HPS の理念と実践を日本の医療現場と結びつけて考えることができる
2. HPS 導入における問題点と期待される効果、今後の発展を考えることができる。

講師名 服部 清 (静岡市障害者歯科保健センター 障害者歯科)

(講義テーマ) 小児歯科および障害者歯科を学ぶ

(教育の目標)

1. 子どもたちの歯や口の問題について理解を深めます
2. 小児病院で行われる歯科医療について理解を深めます
3. 歯科で行われるプレパレーションの技法を理解します
4. 自閉症などの発達に障害のある子どもたちへの医療現場での支援方法について理解します

(受講生にもたらす教育成果)

1. 小児歯科・障害者歯科について理解を深め、小児病院で行われる歯科医療でも HPS が係わる必要があることを学びます。
2. 歯科医療の現場でおこなわれるプレパレーションの方法を学びます。
3. 定型発達のこどもたちでなく発達に障害のある子どもたちへの支援方法を学びます。

講師名 奈良間美保（名古屋大学 小児看護学）

（講義テーマ） HPSと小児看護の協働と連携

（教育の目標）

ホスピタル・プレイ・スペシャリスト(HPS)が小児医療チームの中で協働する専門職として、看護師が挙げられます。看護師とHPSは、子どもが治療を受けながらも安心して生活できるような環境を整える役割を担います。日本の小児医療の現状を理解しながら、看護の役割を学ぶことによって、協働の意義や方法について考えます。本講義は看護師とHPSが協働するための土台作りを目的にします。

（受講生にもたらす教育成果）

1. 本講義をとって小児看護に対する理解が深まります。
2. 本講義を通して、専門職としての看護師の職業観が理解できます。
3. 本講義を通して、遊びを専門技術にしているHPSと看護師との協働の必要性が理解できます。

講師名 山梨 華子（静岡県静岡手をつなぐ親の会）

（講義テーマ） 障害児その家族にとっての医療・病院環境

（教育の目標）

1. 障がいを持っている子どもと医療との関係について、当事者やその家族からのお話を聞きます。
2. 家族が医療関係者にどのような思いを持っているのか、当事者の気持ちを聞きます。
3. 病院における医学以外のアプローチの必要性についてお話を聞きます。

（受講生にもたらす教育成果）

1. 障がいをもつ子どもの家族の気持ちを理解することができます。
2. 急性期における親の気持ちを理解することができます。
3. 病院における医学以外のサポートの必要性について学びます。
4. HPSに求められている役割を明確化します。

講師名 <sup>さかうえ</sup>坂上和子（NPO 法人病気の子ども支援ネット遊びのボランティア代表者）

（講義テーマ） 病気の子どもの遊び その意義と課題を学ぶ

（教育の目標）

1. 入院児の置かれた環境と入院中の子育て支援の施策の現状を学びます。
2. 病気の子どもは、疾病別、年齢別、付き添いの有無などを考慮しながら遊びを設定します。安全で豊かな遊びと教材等を学びます。
3. 家族ときょうだいの置かれた現状を学びます。
4. 遊びのボランティアの働きを調査結果から学びます。
5. 子どもを亡くした家族の思いと支援について学びます。

（受講生にもたらす教育成果）

1. 遊びは心を癒す治療薬ともいえる、なくてはならないものです。ビデオ、写真などでその具体的な内容を学び、実際に教材に触れ、初心者でも現場ですぐに役だつ技法を学びます。
2. 子どもは病人であるまえに子どもです。子どもに自然体で接する技術を学びます。

講師名 第1期生修了生 HPS 小長谷秀子 HPS 中山陽子

(講義テーマ) HPSとしての第1歩

(教育の目標)

1. HPSとしての病院での関わり  
プリパレーションとディストラクションについて一緒に考えます。
2. HPSとしての在宅児とその家族への支援  
Playの必要性和障害を持った児と健常児へのPlayの違いを考えます。

(受講生にもたらす教育成果)

1. HPSが他職種と連携をとりながらプリパレーション・ディストラクションに取り組み始めた実例を知ることにより、HPSの役割をより身近なものとして捉えることが出来ます。
2. HPSの支援としての在宅支援を知り、HPSのPlayの考え方を確認することが出来ます。
3. 日本におけるHPSの普及の方策について一緒に考えることができます。

講師名 山本和子 (日本医療保育学会)

(講義テーマ) 医療現場で働く保育士の役割や入院児のニーズ・多職種 (HPS) との協働について学ぶ

(教育の目標)

1. 病棟で働く保育士の歴史的背景を学びます。
2. 入院している子どもを支援する保育士の役割について学びます。
3. 遊びが入院している子どもの成長発達を促し、病気と闘う原動力になっていることを学びます。
4. 医療現場で働くスタッフが、協働して子どもの入院生活を支援することの大切さを学びます

(受講生にもたらす教育成果)

1. 医療現場で働く保育士の役割を学びます。
2. 医療の現場は多くの医療スタッフが働いています。特に、保育士とHPSとの関係は共有するところが多くあるため、それぞれが子どものために協働して行くことが、子どもにとって最善の環境を提供することであることを認識し関わることを学びます。
3. 医療現場はともすれば、医療優先になる傾向があります。病気が治ればそれでよいのではなく、常に子どもは成長発達していることを理解した中で関わることの大切さを学びます。

講師名 長嶋正實 (あいち小児保健医療総合センター 名誉センター長)

(講義テーマ) 子どもの療養環境

(教育の目標)

1. 世界の子どもの療養環境について考えます。特に日本は世界とどのような違いがあるか、考えます。
2. 日本の小児医療における療養環境の問題点は何かを考えます。
3. 今後の方向性を考えます。

(受講生にもたらす教育成果)

1. 子どもの療養環境に関し広い視野で考えることが出来ます。

2. 子どもが医療を受ける際の療養環境の重要性を理解します。
3. 日本における小児医療や子どもの療養環境の問題点を考えます。
4. 今後、日本でさらにより療養環境を作るために何をすべきかを考える機会が与えられます。

### (3) 実習編

受講生は、2週間の講義を受講した後、HPSの実習を行う。実習の目的は以下の5つである。

#### (実習の目的)

- ① HPSJになりたいと希望している実習生に対し、遊びと病児に関する専門知識と技術を教授し、HPSJとしての専門性を豊かにすること。
- ② 病院において実施されている遊びのプログラムに参加したり、計画する経験をもつこと。
- ③ 子どもに対する遊びを用いた支援方法を開発したり、創造したりするための機会と、パイオニアとしての自覚を与えること。
- ④ 病児と遊び支援の接点が開発途中にあることを理解した上で、病児にも遊びが必要であり、治療を助けるツールになることを、病院管理者も含め社会全体に啓蒙していくことの重要性を認識すること。
- ⑤ 実習生が実習中に学んだことや疑問に思ったことを、ふさわしい方法(遊びのプログラムの計画書、日誌、会議など)をとおして必要な人に伝えるようにする能力を培う。

#### (実習中の課題)

実習中、実習生は3つの課題に挑戦する

##### ・課題1 観察レポート(実習初期おこなう課題)

病院で出会う子どもたちについて、そのおかれている環境を踏まえ、表情やコミュニケーションや行動などを観察し、それぞれの状況に応じたニーズを考察し、HPSの役割について論じる。

例 救急外来を通して入院した子ども 身体的な障害を持つ子ども 手術前の子ども、手術後の子ども 行動を制限されている子ども 外来待合室での子ども痛みを伴う処置の前後での子どもの行動、表情の変化など

##### ・課題2 遊びの計画(実習中期におこなう課題)

実習病院で各年齢、発達段階を評価した上での遊びの計画を作成し、その計画に基づいて遊びを提供し、子どもたちの反応を観察しレポートを作成する。

##### ・課題3 おもちゃプロジェクト(実習後期におこなう課題)

入院している子ども、手術前や後の子ども、行動を制限されている子どもなど、違う状況に置かれている子どもを想定し、その子どもにあったおもちゃを自ら計画し、材料を集めて作成する。作成したおもちゃを実際に使って子どもたちと遊び、子どもの反応を観察し、作成したおもちゃを評価する。

#### (その他のHPSJ実習の展開と指導方法)

その他、実習中に学ぶ機会があれば学んでほしい項目として、以下を挙げている。

- ① 病児(含・家族)理解及びその生活課題、児童の福祉という視点から見た病児のニーズに関する理解を深めること。
- ② 病院におけるコメディカル職の役割に関する理解を深めること。
- ③ 実習病院の設置目的、組織、業務体系等の機構、機能、運営に関する理解を深める。
- ④ 病院と地域の社会資源等に関する理解を深める。

- ⑤ 病児（含・家族）に対して共感的、理解的に応答する技能を深める。
- ⑥ 病児に対する遊びを通じた援助方法について理解する。
- ⑦ 個別援助計画や行事等（模擬的なものを含む）の企画・立案・実行の能力を深める。
- ⑧ 援助に必要な社会資源を活用する能力を高める。
- ⑨ 場面や相手に応じたふさわしい対人関係の形成、他職種との連携を行う能力を高める。
- ⑩ 実習記録や各種記録を的確に作成する能力を高める
- ⑬ 病院の出勤時間や注意事項等の規則を遵守させる。
- ⑭ 実習職種の職務内容を取得しようとする意欲、熱意を醸成する。
- ⑮ 病児（含・家族）に積極的に関わろうとする態度を養う。
- ⑯ 利用者の人権・人格を尊重する態度を養う。
- ⑰ 実習指導担当者の指導、助言を積極的に求めようとする態度を養う。
- ⑱ 職場における他職種・多職員と協働しようとする態度を養う。

第1クールにおいては、HPSがまだ定着していない中で、HPSの実習をしなければならないという困難があったものの、同じHPSの講習を受けた現職の医療現場で働く保育士が、1名の実習生をスーパーヴァイズし、2人で協働しながらHPSとしての実習を組み立てていく経験を通し、HPSの視点や方法論を実証していった。保育士からHPSへの変化と転換は、実習日誌や、課題のレポートなどから見えてくる。観察レポートにおいても、状況に応じてHPSならばどのように支援するのか、その支援の内容が具体的に書かれており、HPSの技術がまだ生かされていない現状に対する落胆が表現されていたものが多かった。遊びの計画では、慢性疾患の子どもに対しては、再入院してくることを予想して継続した遊びを組み立てる視点や、これまではあまりかかわってこなかった思春期の子どもたちへのかかわりの工夫などが見られた。おもちゃプロジェクトでは、サークルベッドで安静を余儀なくされている子どもに対するおもちゃ作りや、子どもの自己決定権を尊重した遊びの提供方法など、随所にHPSの学びが生かされていた。

また、家族をひとつのグループとして考え、子どもを支援することは、すなわち家族を支援することにつながるというファミリー・センター・ケアの理念に対する実践上の気づきも、レポートから読み取ることができた。やはり、机上の理論と実践を結びつけるための実習の教育的効果について、強く感じる結果となった。受講生からは、実習が1週間終わった時点で、大学に戻り、スーパーヴィジョンを受けられるようにしたらどうだろうか、という意見や、講義を受講している間に見学実習を行ったらどうだろうか、などの意見もあったので今後検討していきたい。また、英国の病院における実習も、異文化にもとづく子どもの医療とHPSのかかわりを学ぶよいチャンスになるため、計画していきたいと考える。

### Ⅲ 終わりに

紙幅の関係上、本論文はこれまで2回おこなったHPS養成講座のカリキュラムをまとめるにとどまるが、日本におけるHPS養成のカリキュラムを構成するためには、講座受講生の学び自体を分析評価する必要がある。そのため、受講生には入口調査と出口調査を行い学びの効果を測定している。また、修了生がHPSとして医療現場でおこなっている活動を評価し、遊びを使って病児を支援することにより、病児とその家族、またその他の医療従事者にも貢献できるHPSの役割の認知度を高めていきたいと考えている。

(参考文献)

- ① Save the Children, Hospital:A DEPRIVED ENVIROMENT FOR CHILDREN?(1989)
- ② Hospital Play Staff Education Trust, Hand Book for Superuisors of Hospital Play Specialist Students on Placement
- ③ HPS Japan, 「平成 19 年度 社会人の学び直しニーズ対応 教育推進プログラム委託業務成果報告書」、静岡県立大学短期大学部

(2008 年 10 月 31 日受理)